

シリーズ「一品の世界」 第5回

絵物語「布屋庄左衛門の店先」－桶川宿商家店先絵馬－

令和2年1月19日（日）午後2時

桶川市歴史民俗資料館 紅谷有美



『桶川宿商家店先絵馬』 桶川市指定文化財

幕末。桶川宿は紅花の取引で栄えました。紅花商人布屋庄左衛門の店先を描いたこの大絵馬は、文久3年（1863）に、上州館林の米屋勝右衛門、近江商人である小泉榮助と利七によって庄左衛門家の屋敷神である稲荷社に奉納されたものです。

この絵馬を描いた絵師は溪斎北尾重光。彼によって細密に描かれたこの絵馬は、幕末を生きた人びとの息吹を今に伝えてくれます。

本日の講座、シリーズ「一品の世界」では、この「桶川宿商家店先絵馬」を読み解きながら、中山道桶川宿の時代が終わろうとする一瞬の物語を再現してみましょう。

1. 絵画資料としての絵馬

(1) 絵馬の起源

絵馬とは、神社や寺院に祈願するとき、あるいは願いが叶って感謝の気持ちを伝えるときに社寺に奉納する板絵です。

馬は古くから神の乗り物として神聖視されていました。古代の人々は、生馬を神に捧げつつ、その代用として土馬(土製馬形)や木馬(木製馬形)などの馬形を献上することも行っていました。やがて、板に描いた馬、すなわち絵馬へと変化したと考えられています。



伊場遺跡出土絵馬（静岡県指定文化財）
奈良時代～平安時代 日本最古級の絵馬

絵馬という言葉は、寛弘9年（1012）6月25日に大江匡衡（おおえのまさひら）が京都の北野天満宮に奉納した品々の目録の中に「色紙絵馬三疋」と記されたのが最初です。その実態は詳らかではありませんが、平安時代中期には絵馬といわれるものが存在したことがわかります。

参考. 大江匡衡『本朝文粹』一三

(2) 絵馬の変遷 一大絵馬の世界―

絵馬は、戦国時代から江戸時代初期には、形や図柄が大きく変わってきます。

すなわち、祈願の民具として民間信仰的色彩の強い小絵馬と、神仏への報謝を表す奉納品としての大絵馬の二種が作られるようになりました。



小絵馬 前領家山王社 安永7年（1778）

大絵馬には、馬の図だけでなく参詣図、境内図、武者絵、歌仙絵、船絵馬、武具絵馬、算額、風景図、生業図などさまざまなものが描かれるようになります。

その奉納は、町人や農民が力をもった江戸時代後期にあたる文化文政期に最盛期を迎えます。寺社では、堂や拝殿ばかりではなく絵馬堂が造られ、額絵として人びとの目を楽しませていました。



天沼薬師堂奉納大絵馬 安永2年（1773）

参考 岩井宏實『絵馬 ものと人間の文化史 12』法政大学出版局 1974年

2. 中山道桶川宿と紅花 ―桶川宿商家店先絵馬の歴史的背景―

桶川市は、江戸と近江（滋賀県）の草津を結ぶ、中山道 67 次の宿場の一つとして、今に続く発展の基礎がすえられました。

中山道は、徳川家康が天正 18 年（1590）に江戸に本拠を置いた後、五街道の一つとして整備が進められました。やがて、関ヶ原の合戦を経て、江戸幕府の全国支配の確立の中で街道と伝馬制度が整えられ、三代将軍家光によって参勤交代の制度が確立した寛永 12 年（1635）ころには、ここ桶川宿もすでに成立していたと考えられます。

桶川宿の開設当初に近い寛永 2 年（1625）の家数は 58 軒であり、伝馬の役割を負った街道沿いの農村といったところでした。

江戸時代の社会がその中期から後期に大きく移り変わろうとする天明・寛政年間（1781～1801）に、江戸の商人によって最上紅花の種がもたらされ、その生産が始まりました。

すなわち、天明の飢饉に見舞われる中で、浅間山が天明 3 年（1783）に噴火し、天明 4 年（1784）に桶川宿は大火に見舞われています。

その復興の中で、桶川宿の人びとも、農業や街道の稼ぎから商業に暮らしの基礎を置くようになり、桶川宿も「町」としての姿を示すようになったようです。

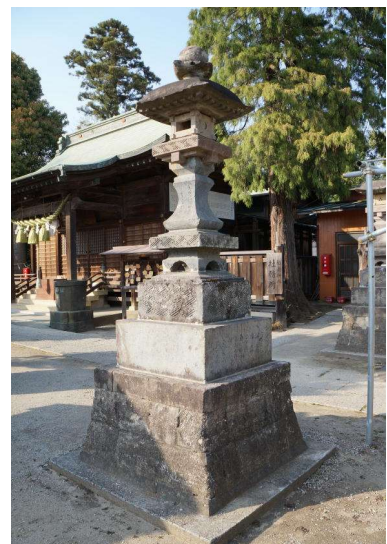
文政年間の末期に編纂が完了した『新編武蔵風土記稿』の桶川宿の項に、「近來多ク紅花ヲ植テ臙脂ヲ製セリ近郷ノ人コレヲ桶川臙脂ト称ス」と記され、紅花が桶川地方の産物として知られるようになったと記されています。

その後、桶川宿は、「中山道もの」と言われた良質の麦や紅花の集散地として栄え、幕末に近い天保年間（1840 年ころ）には、桶川宿近傍から始まった紅花の栽培は、足立郡から入間郡へと広がり、出羽に次ぐ産地に成長していきました。

このころ、京の紅花問屋と桶川宿の商人は直取引を始め、桶川宿の紅花は全盛期を迎えます。

安政 4 年（1857）に建立され、桶川稲荷神社境内に今も残る二つの石燈籠は、その台座に 24 名の紅花商人の名が刻まれ、桶川宿及び近傍の紅花の買継商人の名が刻まれており、その中に西村庄左衛門の名を見ることができます。

中山道桶川宿最後の大事件として文久元年（1861）の皇女和宮の江戸下向が記録されています。10 月 20 日に京を立った行列は、京方 10,000 人、江戸方 15,000 人という未曾有の大交通で、桶川宿は全戸がその宿泊に当たっています。



『紅花商人寄進の石燈籠』市指定文化財

3. 北尾重光が描いた小高家の店先

小高家の屋敷神に奉納されたこの大絵馬は、埼玉県内における宿場の商家の姿を伝える資料として、注目されてきました。

描かれた布屋庄左衛門の店先の様子は細密かつ具象的であり、これを描いた絵師の筆力の高さに驚かされます。

(1) 溪斎北尾重光

絵馬を描いたのは、右下の銘から溪斎北尾重光であることが分かります。

北尾重光は文化11年(1814)江戸に生まれました。北尾派の門に入り、浮世絵を学び、法橋という位を授けられています。

重光は、25歳頃から館林の城下の田町(下町)に店を構え、各種の幟や絵馬を描くことを生業とし、明治16年(1883)11月16日に71歳で没し、館林市内の覚応寺に葬られました。現在、その墓は、館林市の史跡に指定されています。

重光の絵馬は、館林を中心とした社寺に300枚以上奉納されたといわれています。埼玉県では桶川市の他に熊谷市と加須市にも伝えられています。

重光の絵は、精細な写実的描写を特徴としていて、あたかも、写真を撮るように時代を記録しています。

幕末から明治時代へ、すなわち、近世から近代に至る激動期を生きた人びとの思いを受け止めた重光の絵馬は、見る人に過ぎ去った時代への愛惜の念を呼び起こします。

館林市では、重光が描いた館林城の絵馬をもとに館林城の再建を目指す市民の活動も始まっているそうです。



「浮世絵師北尾重光の墓」覚応寺



「明治戊辰戦争磐城進撃絵馬」(館林市指定重要文化財)

参考 『北尾重光の絵馬 人々の願いと感謝 館林市立資料館特別展』 館林市教育委員会 2003年

(2) 重光が描いた小高家

この商店店先絵馬についても、店の構造や情景が詳細に描かれており、中山道の宿場における商家を知る貴重な資料として注目されています。

絵馬に描かれている小高家（布屋庄左衛門）の店先を観察してみましょう。

景1 瓦葺きの堂々たる母屋と袖蔵

文化3年（1806）に幕府に献上された『中山道分間延絵図』を見ると、桶川宿は周辺の他の宿場に比べ、瓦葺き平入りの町屋が多く見られます。

布屋庄左衛門の店は、桶川宿本陣に近く、宿内のほぼ中央に位置していました。

絵馬に描かれているすべての建物に瓦が葺かれており、その背景にある経済力の強さが窺われます。



「中山道分間延絵図」より

桶川宿に瓦葺きの町屋が多く見られることは、天明4年（1784）12月、寛政10年（1798）正月に宿内の過半を焼亡する大火に見舞われ、復興を遂げる中で防火意識が高まっていったと推測されます。

また、桶川宿が街道沿いの宿村から、紅花や麦などの近郷の産物を商う在郷町へと宿場の性格が変わり、豊かな経済力を背景として可能となったのでしょう。



景2 店先では往来の人々に菓子を売る

18世紀、江戸時代も中期を過ぎると、江戸時代の社会も成熟を迎え、人びとの暮らしにもゆとりが生まれます。

この頃、伊勢参りなどの寺社参詣や湯治を中心とした庶民の旅が盛んになり、宿場の名物として菓子が売られ、人々が楽しむようになりました。

桶川宿においても、寛政12年（1800）年の記録によると、当時の家数247軒の内、83軒が旅宿や食物の商いにいそしんでいたことが記録されています。

穀物問屋として知られた布屋ですが、街

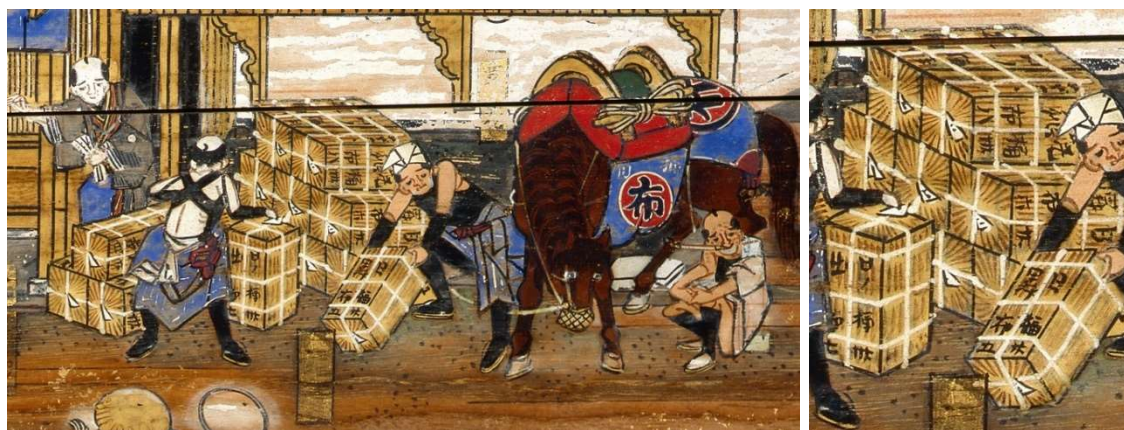


道を往来する人びとに菓子売っていました。重光は、店に並べられた饅頭らしい菓子の色まで描き、よく見ると竹皮に包まれた菓子も描かれています。店先の路上には、立派な朱塗りの箱看板が設えられています。

景3 袖蔵の前の馬の背に荷が積み込まれようとしている荷駄は紅花か

袖倉の前に積まれた荷駄には、「桶布」「日の出」といった文字が細密に描かれています。「日の出」という紅花の商標が当時の資料に見られ、紅花の可能性が高いと思われます。

桶川地方の紅花取引の実態を伝える『須田家日記帳』にも日の出印の荷を作ったという記録が見られます。配下の仲買人から紅餅を買い集めた桶川宿とその周辺の商人は、紅餅をとりまとめて荷造りし、京の間屋に送っていました。この景は、荷造りの実態を知る唯一の資料として貴重です。



景4 戸口に立つ人物がもつ袋は、紅餅を入れる袋か

紅餅は紙袋に入れられ、その表には商標をつける習慣があったことが、知られています。

一袋には五百匁の紅餅が入り、買継ぎ商人である布屋は、仲買人や農家と袋の単位で取引をしていました。

買継ぎ問屋は、その品質を見極めながら値をつけ、ときには買い入れを断ることもありました。買取った紅餅は十六袋ごとにまとめて一丸とします。

さらに一丸を四箇まとめて一駄とし、その重さは三十二貫（120 キログラム）となりました。当時は、宿場に備えた馬が運ぶ荷は四十貫（約 150 キログラム）までと定められていたそうです。



4. 絵馬をめぐる人々

『桶川宿商家店先絵馬』に描かれた人物、またこの絵馬をめぐる人びとについて、考えてみましょう。

(1) 米屋勝右衛門

北関東の城下町である館林の正田家は、穀物を商い、屋号を米屋といました。本家は、家督を継ぐと文右衛門を名乗り、米屋文右衛門、通称「米文」の名で上方にも知られる豪商でした。

米屋勝右衛門は、初代米屋文右衛門の次男、勝次郎と思われます。文政2年(1819)に分家し、館林城下で、呉服、糸物商を営んでいました。明治6年(1873)に正田本家が醤油醸造業を始めるにあたって、二代目文右衛門は勝次郎家に移り住んでおり、彼が正田一族の有力な分家であったことがうかがわれます。

桶川と館林との関わりについては、『根本山参詣飛渡里案内』の桶川宿の項に描かれた大坂屋佐五兵衛の店先に「館林定飛脚」の看板を確認できます。このことから、利根川の舟運や例幣使街道に接続する館林との間に定期的な飛脚便があり、商業上の交流があったことを示しています。

近代に至ると、3代目文右衛門は明治6年に醤油醸造業を始め、現代に続く「正田醤油株式会社」(本社館林市)の基礎をつくりました。

また、分家筋の正田貞一郎氏は明治33年(1900)年に館林製粉株式会社を設立し、日清製粉株式会社を中核とする日清製粉グループへと発展していきました。

正田貞一郎氏の令孫が、皇室に入り、美智子上皇后となったことはよく知られています。



(2) 小泉榮助、利七

小泉家は、享保元年(1716)に小泉太兵衛が商人として家を興し、近江の湖東地方にあたる五箇荘を拠点として栄えた近江商人です。

小泉家には、「助」を通り名とする一族があり、幕末に近い弘化4年(1847)に六代目に当たる小泉新助が五箇荘を出て、京都に近江屋を屋号とする麻布と絹織物問屋を開業しています。

また、小泉家は、呉服商として関東にも進出しており、同族の中に小泉榮助と名乗る者がおり、年代的にも符合します。布屋庄左衛門家の絵馬に名を記す人物との関係についてはなお調査を続ける必要があるかと思えます。

京都に進出した小泉家は、近代以降も発展を続け、現代においてもコイズミグループとして、繊維及びアパレルの領域から、照明や日用家電品など広い分野の事業を展開しています。

（３）布屋庄左衛門

江戸時代に布屋庄左衛門を名乗った小高家は、桶川宿の草創期から続く旧家です。江戸時代後期には布屋を、幕末以降に西村を屋号とし、紅花や麦などの穀物を取り扱う桶川宿を代表する有力な商人でした。

小高家累代の墓石に刻まれた墓誌をたよりに、絵馬の奉納を受けた当時の布屋庄左衛門の来歴を訪ねてみました。

天保８年（1837）に没した小高庄左衛門は、出井家から仙之助を養子に迎えて家の継承を図りました。しかしながら、仙之助は男子を得ることができず、西村家に入っていた実弟である宗吉に布屋の家督を譲って隠居し、宗吉が布屋庄左衛門を継承しています。この折、仙之助の娘と宗吉の嫡男を娶せることとし、小高家の継承を目指しました。

宗吉がすでに西村家の人となっていたためか、安政年間の須田家日記帳や紅花商人寄進の石灯籠には西村庄左衛門の名が見られ、安政６年（1859）に建立された稲荷神社境内の頌徳碑には小高仙之助と小高庄左衛門の名がともに刻まれています。

これらのことから、絵馬の奉納を受けた布屋庄左衛門は西村宗吉であろうと思われます。

やがて、宗吉の嫡男と仙之助の娘の間に生まれた正太郎が、二人の祖父の思いを受けて、西村を屋号とする近代の小高家を継承していきます。

また、宗吉に布屋庄左衛門の家督を譲って隠居した仙之助は、幕末から明治の激動期に本陣府川家の後見を勤めたことが墓誌に刻まれています。

（４）絵馬にこめた願い

絵馬は祈願とその成就を神に報謝するために奉納されます。江州小泉榮助と利七及び館林町米屋勝右衛門は、小高家と密接な関わりをもっていたと考えられ、館林町屈指の絵師である北尾重光にこの絵馬を描かせ、小高家と自らの繁栄を祈願しています。

共に商人である彼らが祈った繁栄とは何でしょうか。

重光は、小高家の生業である菓子屋の店先と、紅花の出荷風景を克明に描いています。

ここでは、絵馬の奉納に関わった人びとが共有する繁栄とは、紅花の取引の繁栄であったと考えたいと思います。

先述のとおり、米屋勝右衛門は呉服商、糸商を営み、小高家は紅花を取り扱っていました。近江商人である小泉家は、京都で呉服を買い、関東呉服を多く扱っていました。

呉服と紅花が結びつき、それを近江商人のネットワークを持つ小泉家が出荷に携わっていたのではでしょうか。

ではなぜ、文久３年（1863）に小高家の繁栄を祈願した絵馬が奉納されたのでしょうか。

私は、この絵馬は小高家の跡取り正太郎の誕生と関係があるのではないかと考えます。

小高家では、天保８年（1837）に没した小高庄左衛門の後、小高家の継承をめぐって、もともと実の兄弟であった小高家の養子である仙之助と西村家に入っていた宗吉が協力して、家の継承に努めています。その結果、小高家の仙之助の娘たまと西村家の宗吉の嫡男

である西藏との間に、待望の嗣子となる正太郎が誕生しています。正太郎の生年は不明ですが、昭和 17 年に 79 歳で没していることから、文久 2、3 年頃に誕生したことになります。

家の継承こそが、家門の繁栄の礎に他ならず、小高家待望の跡継ぎが生まれたこと寿ぎ、この絵馬が屋敷神に奉納されたのではないのでしょうか。

絵師北尾重光は、正田家の依頼によって、館林の目車稲荷神社に奉納する相撲の絵馬を明治 6 年（1873）に描いています。この年、正田本家、すなわち米屋文右衛門は醤油醸造業に転じ、近代への道を歩み初めています。

絵馬奉納の世話人の中には、正田勝治郎こと米屋勝右衛門の名を見ることができます。

大絵馬の奉納とは、人生の節目、あるいは家の画期を彩る営みであったのではないのでしょうか。



5. 考察 ―桶川宿商家店先絵馬と紅花の取引―

『桶川宿商家店先絵馬』は、蔵の前に描かれた荷駄から紅花の出荷風景を描いていることは先述のとおりです。このことから、絵馬を奉納した人々と紅花の取引の関わりを考えてみたいと思います。

(1) 紅花の取引

桶川の紅花は、最上紅花の種が江戸の商人によって、天明・寛政年間（1781～1801）にもたらされたことに始まると言われています。

また、桶川の商人と関わりの深い、久保村須田家の日記帳の記述から以下のとおりと推測されます。

桶川を始めとする生産地の在郷商人は、京都の紅花問屋の依頼を受けて、前渡金を受けて買い入れを委託される買継ぎ商人であったとされています。

前渡金を元手に、農家が作った紅餅を、直接あるいは仲買人を介して買い集め、荷造りし、京都へ出荷していました。須田家の日記には、正月に京の問屋と相場の連絡をしていることや、仲買人との金銭のやりとり、さらには持ち込まれた紅餅の値踏み、さらには使用人による荷造りや、馬方への輸送の依頼などの様子が生き生きと記されています。

桶川宿における有力な買継ぎ商人であった小高家の店先の光景からは、まさに、こうした取引の姿を見いだすことができます。

紅餅を入れたであろう袋をもって店に入ろうとしているのは、庄左衛門配下の仲買人でしょうか。顔は見えませんが、店の中でこれを迎えるのは隠居した先代の仙之助のような気がします。そして、蔵の前で証文を手には差配しているのは宗吉こと西村庄左衛門でしょう。

しっかりと荷造りされた荷には、「日の出」といった商標が記され、桶川の布屋の荷であることが番附されています。

高額な商品であった紅花の取引では、その前渡金は大きな金額となります。記録の残る久保村須田家の場合、安政2年（1855）には 2,736 両余の前渡金が京都の紅花問屋より送金されています。

買継ぎにあたる桶川の商人は、この前渡金を元に、農家や仲買人に仕入金を貸し付け、買い付けの後に利子を含めて代金を清算しています。そして、桶川の買継ぎ商人は、京都の紅花問屋に出荷後、前渡金の清算が行われています。

このような高額の金子と商品が行き交う遠隔地取引を可能にしたのは、輸送と通信、また代金の決済や為替にかかわる飛脚問屋の存在があればこそと推測できます。

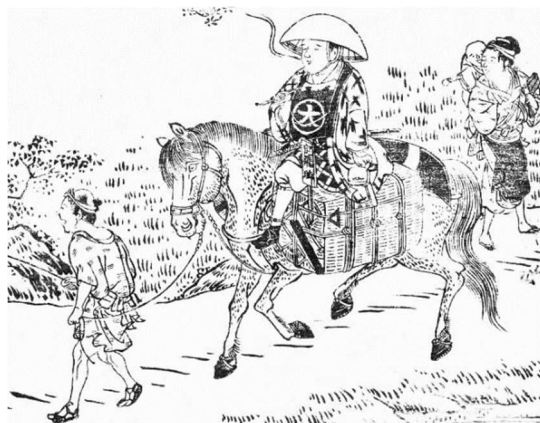
参考 『上尾市文化財調査報告 第3集 武州の紅花』上尾市教育委員会 1978年

『日記帳 紅花商人須田家日記（上尾市史資料第6集）』上尾市図書館編 1976年

(2) 紅花取引と飛脚

江戸時代、遠隔地間の通信手段は飛脚が担っていました。飛脚は、大きく分けると三種類あります。幕府の公文書を運ぶ「継飛脚」、幕府にならって諸藩がはじめた「大名飛脚」、そして、町人が設立した民間の「町飛脚」です。

17世紀の半ばを過ぎると、上方を中心にして町飛脚が発達し、通信網が整備されてきます。民間の飛脚としては、江戸の定飛脚、京都の順番飛脚、大坂の三度飛脚が有名です。



定飛脚の率領 『東海道名所図会』巻4より
国立国会図書館蔵

この三者は飛脚仲間として相互に協力し、商人の小荷物、為替、現金などの輸送も担当するようになりました。広域にわたる商取引をささえていました。

宿駅の交通量が増え、人馬継立が混み合うようになると、延着が目立つようになったため、江戸の定飛脚問屋9軒の願いにより、天明2年(1782)に幕府が宿駅での人馬継立を優先的に御定賃銭で使用する特権を認めました。紅花が桶川にきたのは、ちょうどこの頃です。

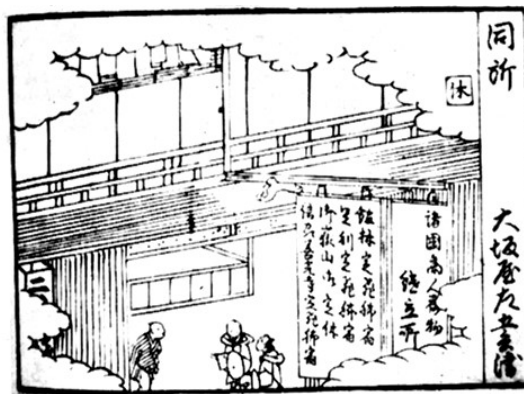
桶川地方の紅花の早い取引の例として、上州桐生の近江屋を介した取引があります。享和元年(1801)に南村の須田治兵衛は、近江屋をとおして、京の伊勢屋理右衛門らと取引を行っています。京の伊勢屋理右衛門から出された仕切りには、近江屋が為替によって前渡金を出していることも確認できます。

桶川地方の紅花は、早くには陸送にて京都へ送られていましたが、文化年間頃から船積み輸送が多くなりました。

その後も、陸送が全く無くなったわけではなく、京の紅花問屋との間では、相場などの情報のやりとり、そして為替による代金決済に飛脚が関わり、広域の取引を支えていました。

このことは、幕末の江戸株仲間商人との紅花訴訟において、桶川宿の商人は、京の紅花問屋と盛んに情報交換を行い、陸送による輸送も行っていたことからわかります。

さらに、桶川宿に店を構えていた飛脚屋と思われる大阪屋佐五兵衛が訴訟人になっていたことも注目されます。



「根本山参詣路飛渡里安内」(安政6年)より

（３）近江商人と飛脚

近江商人とは、近江を本宅・本店とし、他国へ行商した商人の総称です。近江商人は、行商をととして商品についての需要と供給の状況や地域による価格差などの情報を速やかに入手して商業活動をおこない、販路を獲得し資本を貯えると、全国各地に枝店を積極的に開設しました。

とくに、近江商人は、上州（群馬県）に呉服や絹織物を扱う中で多くの枝店を展開していました。これに寄り添うかのように、江戸や京の飛脚問屋は、藤岡、高崎、桐生といった街道筋に出店しています。

江戸時代の商品流通に大きな役割を果たした近江商人と飛脚の関わりは不明な点が多いとされていますが、上州における両者の関わりを見ると、関東と上方の商品流通は両者が手を携えて成立していたことは明らかでしょう。

参考 宇佐美英機「商いの公用語は江州弁 近江商人の陸の商い」2007 年

ミツカン水の文化センター機関誌『水の文化』25 号所収 <http://www.mizu.gr.jp/kikanshi/no25/>

今回の講座は、当館において2月に予定されている企画展「描かれた町と村」に関連して、中山道における商家の姿を伝える貴重な資料である「桶川宿商家店先絵馬」の資料調査を行った中で知ったことをお伝えしました。

絵馬の奉納者が北関東に位置する上州（群馬県）館林の商人と近江商人であることをどのように理解するかが大きな課題となりました。

従来、桶川宿の紅花は、江戸の小間物問屋仲間商人から種がもたらされたことに始まり、江戸を介して菱垣廻船に船積みして京へと出荷されるという海の道の流通を前提に考えてきました。

私は、絵馬の考察をととして、陸の道の重要性を改めて再認識しました。

桶川宿からは、菖蒲町を経て館林や桐生に向かう脇街道が分岐しており、館林との間には定飛脚も通っていました。

小高家に奉納された絵馬に名を残す米屋勝右衛門（正田勝次郎）は絹織物を扱い、近江商人小泉榮助らは京の有力な呉服問屋の一族と考えられます。

紅花は、江戸、大坂、京の三都に及ぶ広い商圈で扱われる特産物です。桶川市指定文化財「桶川宿商家店先絵馬」は、幕末の桶川宿の商人が近江商人のネットワークの中で上州や京の人びとと交流をもっていたことを物語っています。

この絵馬について考察する中で、当時の商取引は、物流という側面ばかりではなく、人と人の交流の中で全国各地に素晴らしい文化を育んだ営みであることに思いを馳せずにはられません。

以上